# みんなの文芸

## 引間豐作選　投稿数24句

塩水の浅蜊ころげて砂をはく　三沢　沢野　恒平

(評)　現在世界において、女性が戦場に臨むことが何の不思議もないご時勢。それと引き換えにと言う訳ではないが、男性が厨房に立つと言うことに何の抵抗もないこの頃では、それによる厨俳句が普通になってきた。掲句は浅蜊を料るべく砂を吐かせる始終を観察しての句だが、確かに見ていると潮を吹くとその反動で殻がよく動き、噴き出す水で廻りが濡れてしまう。この作での絶妙なる品詞は「ころげて」にあり、すこぶる傑作と称嘆。シヅ子句、座禅草が耳を澄まして水音を聞くとの詠みは確かに水辺にて座禅三昧の僧の姿を彷彿させる。

水音に耳すまし居る座禅草　皆野　大沼シヅ子
ひとひらの雲に始まる花の雨　下田野　中田　久恵
囀りや結願寺へ尾根つづき　下日野沢　小川　もと
金色の矢車の音に目覚めおり　金沢　青木冨佐子
巡礼の影待つ渓の山ざくら　下日野沢　高山　ユウ
桜挿し暮らしの香り残る甕　三沢　新井　民子
日々通うバイクにさくら咲き満てり　三沢　真下　杏子
新茶汲む友の手捌きうすみどり　金崎　設楽　武子
散る花の行く辺いずくぞ遠がすみ　下田野　藤原　道男
春がすみ流るる水もさそふ遊　皆野　植竹美恵子
黄水仙啄む小鳥朝の庭　三沢　長谷河ソノ
かたくりやバス延長で峡明かる　金沢　関和　トヨ

## 中田國太郎選　投稿数14首

**朝あさに求人ジャーナル見入る吾帰らぬ青春なお追いかくる**　皆野　塩田　千代

(評)　人は、年輪を重ねれば重ねるほど若き日の郷愁が深まるものである。作者は、その気持を率直に詠み、共感の持てるいい歌である。目を輝かせ、夢を語る新入社員の若者たちの青春まっただ中の姿は、美しいものである。特に青春を謳歌することもなく戦時下を、グルーミーに生きてきた者にとっては、もう二度とは帰らぬ青春との惜別の情はおさえ難く「なお追いかくる」心境になるのである。哀切きわまりない結句である。新井作、挽歌の哀愁がにじむ。安井作、墨の香が漂う静かな朝に鶯の声。一幅の絵のごとし。「心一つに」がよし。

たまきはる命燃して詠みし歌残して兄の忌日哀しも　皆野　新井　愛子
正座して心一つに墨を磨る静けき朝の鶯の声　皆野　安井　光代
幾年も花を咲かせぬ海棠の今年の蕾そっと撫でやる　三沢　新井　民子
風に舞ひ蝶ひらひらとうかれ飛ぶ心躍るも足萎へて侘し　金崎　山田　雅子
高齢の進む我が区の山あいに十年振りに男児目出度し　野巻　町田　忠次
この家を守らんと気負うわが姿航空写真の庭に小さし　三沢　真下　杏子
広報の貴方の歌を読んでると街人あまた我を励ます　皆野　金子善次郎
連れ合いと生きてるだけで丸儲けけれど今年も馬鈴薯植えたり　皆野　新井　茂
われ米寿嫁は還暦子と孫の幸せとどく赤いブラウス　皆野　吉岡　ヨシ
数学を孫に習ひて漸くに解けたる時の心ときめく　三沢　新井　叶子
そよぐもの木々に生まれし我が庭に来鳴きとよもす百千鳥かな　皆野　笠原三江子
春遅く冬早かりしこの山河ここに住む人皆すばらしい　上日野沢　四方田利男

### 俳句・短歌を募集

作品には、ふりがなをつけ、住所・氏名を明記して企画課へお寄せください。
**8日必着**
1人1句、1首に限ります。